短 報

美容師の皮膚検診結果

Occupational Skin Diseases in
Beauticians

Key words : beautician ; occupational skin disease ; nail deformity

美容師の皮膚疾患については、多くの症例報告^{1,2)}があり、またその労働条件、罹患状況についてのアンケート調査³⁾も実施されている。しかし、集団検診によって罹患状況を調べた報告は、わが国ではほとんど見いだせない。われわれは、美容業従事者について、皮膚症状を中心とする健康診断を実施する機会があったので報告する。

調査方法

1985年7月上旬に、大阪府下の一保健所管内の美容師を対象に、皮膚科医による診察、胸部X線、血圧、検尿、アンケート調査（従事年数、地位、作業分担、自覚症状、既往症など）を実施した。受診者は、女子107名、男子10名、計117名であり、今回は女子の皮膚検診結果について報告する。

調査結果および考察

手（爪を含む）および前腕の皮膚障害の、従事年数別有所見率と、これを障害部位別にみたものをFig.1に示す。手および前腕の皮膚有所見率は、40.2%であり、従事年数別では、1年未満が29%、1年以後はおおむね35~47%の間であった。

美容師に皮膚障害が高率な理由として、(1)一次刺激皮膚炎を起こしやすいチオグリコール酸（コールドパーマ1液）および界面活性剤が使用物質中に存在する。(2)ヘアダイをはじめとする使用物質に、多種のアレルゲンが含まれている。(3)アレルゲンの経皮吸収を容易にする物質や、adjuvant効果のある物質が使用されていること⁴⁾が、あげられている。

これらの原因物質を考慮に入れつつ、部位別の障害状況について以下に示す。

(1) 手掌、手背および指の皮膚障害

受診者の23.4%（25名）に認め、その内訳は、角化および角質増殖10例、鱗屑および落屑5例、皸裂4例、肥厚3例、発赤3例、粗糙2例、小丘疹1例であった（重複あり）。

従事年数別の有所見率をみると、1年未満で低率であり、1~2年をピークに、従事年数が長くなるにしたが

(Number) (17) (17) (19) (18) (22) (14)

Fig.1. Prevalence of dermal changes as related to years of service as beauticians. ▼ : Hands and forearms (total), □ : Palms, dorsal hands and fingers, ● : Nails, ○ : Forearms, △ : Inter-digital spaces.

い減少を示した。このような、有所見率の違いを示す原因として、次の3つのことが考えられる；(1)従事1年未満の者のほとんどは、作業について3、4か月の短期間であったため、皮膚障害の発症に至っていない者が多かったのではないか。(2)従事1~2年の者は、界面活性剤、コールドパーマ液、染毛剤等の、一次刺激皮膚炎や感作性皮膚炎を起こしやすい物質に接するシャンプー作業が多いが、従事年数が長くなるにしたがい、カット、セット作業が中心となり、シャンプー作業が減少しており、従事年数により主に従事する作業が変化するためではないか。Cronin は、英国の職場で行なった調査⁵⁾で、手の湿疹を全対象者の34.1%に認め、作業分担別でみると、シャンプーやパーマ液の洗い落としを主とした作業に携わる junior の90.9%に、カット、セット、ブローを中心に行なっている stylist の4%に、ヘアダイ、パーマ等の expert では発症を認めておらず、手の皮膚障害の発症と作業の内容の関連が深いことを示唆しており、われわれの考えに一致する。(3)Lindemayr は、医療機関を受診した者を対象とした報告⁶⁾において、美容師の湿疹患者（215名）のうち、61.8%が湿疹を理由に離職したと報告しており、美容業を続けることが困難な皮膚障害を生じた者が離職し、皮膚障害を起こしにくい者が残ったということが考えられる。

(2) 爪の変化

受診者の15.0%（16名）に認められ、横溝、表面の凹凸、肥厚、菲薄、軟化、爪甲剝離症、爪甲層状分裂症等が認められた。従事年数別の有所見率をみると、1年

未満で2.9%, 1~2年で0%であり, これに対し10年以上では22%前後であり, 大きな開きがあった。

調査で認めた爪の変化を引き起こす原因および誘因として, 水, 湯, 洗剤, 酸, アルカリを使用する職業, 指先に持続的に力がかかる作業, 水仕事の多い者によくみられる爪カンジダ症, 爪甲周囲の湿疹や皮膚炎の爪甲への波及, 末梢循環障害, マニキュア時の後爪郭部を後退させる行為, マニキュアの除光液の使用等が, あげられている^{7,8)}。

(3) 前腕の皮膚障害

全体の4.7%(5名)と低率であった。伸側・屈側の別でみると, 屈側のみに認めた者は4名, 伸・屈両側に認めた者は1名であり, 5名ともが屈側に発症を認めた。これは, 前腕屈側がシャンプー作業やヘアダイ後の洗髪時に, 髪に付着しているシャンプー液や染毛剤に接触しやすい部位であるため, 手, 指と同様, 刺激や感作を受けやすいものと考えられる。

(4) 指間の皮膚障害

全体の5.6%(6名)と低率であった。指間は液体がたまり, 水やシャンプー液の刺激を受けやすい部位といわれるが, 手掌や指腹に比し, 種々の刺激物質や感作物質との接触の度合いが少ないと考えられ, 発症が少ないと思われる。

おわりに

今回の, われわれの調査における皮膚障害の有所見率は, 40.2%であり, 他の同種の調査と比較を試みたが, 本邦には比較すべき文献を見いだしなかった。英国 Cronin の報告では, 手に湿疹を認めた者は34.2%で, われわれの結果よりやや低い有所見率である。しかし, 従事期間や作業内容により皮膚障害の発症に差異を生じるので, これらの要因を十分考慮に入れた比較が必要であらう。

爪の有所見率は, 従事年数の長いほうが, 短いものより高率であり, この原因について, 今後さらに調査および検討を加えたい。

文 献

- 1) 東 禹彦. 毛髪化粧品: 特にヘアー・ダイによる皮膚障害 (臨床). 香粧会誌 1983; 7: 303-307.
- 2) 東 禹彦. ヘアダイとヘアダイ皮膚炎. 皮膚 1985; 27: 17-28.
- 3) 飯島伸子. 美容業従事者の健康障害に関する調査研究. 桃山学院大学総合研究所報 1983; 9: 1-19.
- 4) 山村雄一, 久木田淳, 佐野榮春, 清寺 眞. 現代皮膚科学大系 20A. 東京: 中山書店, 1985: 212-215.
- 5) Cronin E. Dermatitis of the hands in beauticians. In: Maibach HI, Gellin GA, eds. Occupational and Industrial Dermatology. Chicago: Year Book Medical Publishers, 1982: 215-217.
- 6) Lindemayr H. Das Friseurkzem, Dermatosen 1984; 32: 5-13.
- 7) 山村雄一, 久木田淳, 佐野榮春, 清寺 眞. 現代皮膚科学大系 15. 東京: 中山書店, 1983: 243-263.
- 8) 福代良一, 西山茂夫, 森岡貞雄. 皮膚科診断治療大系 8. 東京: 講談社, 1985: 61-69.

須永匡彦*, 上田照子*, 原 一郎*, 西谷宣雄**, 逢坂隆子***, 飯島伸子****

* 関西医科大学公衆衛生学教室

** 大阪府職業病センター

*** 大阪府大東保健所

**** 桃山学院大学

Masahiko SUNAGA, * Teruko UEDA, * Ichiro HARA, * Nobuo NISHITANI, ** Takako OSAKA*** and Nobuko IJIMA****

* Department of Public Health, Kansai Medical University, Moriguchi, Osaka 570, Japan

** Osaka Prefectural Institute of Occupational Health

*** Daito Health Center, Osaka Prefecture

**** Momoyama Gakuin University

昭和61年10月13日受付

通信先: 須永あて, Reprint requests to M. Sunaga